地域課題に対応できる医療者の育成と町づくりへの貢献

佐藤　裕見子

看護学部地域保健看護学講座

日本は，今二つ大きな課題を抱えている．それは，人口減少と高齢多死である．2025 年には団塊世代が 75 歳に突入し高齢多死社会が始まる．日本における看取りの 80％は病院で行われているが，このまま推移すると 2040 年には 40 万人が病院を締め出されることになる．

そこで，国は老いや看取りを病院から地域に戻すためのシステムとして地域包括ケアシステムの確立を図ることとしている．

そうした中，これからの 40 年の地域包括ケアを担うために求められる人材とは，1）老いや看取りへの看護（ケア）が担える，2）スピリチュアルな看護（ケア）が提供できる，3）一人ひとりのつながりを回復し，新しい町づくりを志向できることであると考える．

広井は，「人間は社会的な存在であり，コミュニティにおいて自分を知っている人と時間を共有し，かかわり持つことにおいて，生きているといえる．存在をしっかり“ケア”してもらうことで，自分は生きているという自己肯定感を持つことにつながる.」，また，コミュニティとは本来「死」という要素をその本質に含むものである．一人ひとりが高齢期あるいは終末期を高いスピリュアリティを持って生きていくためには，「死」を含むコミュニティの再構築が重要である．個人とコミュニティをつなぐものが「ケア」であるとも言っている．

今後，人と人とのつながりを回復できる町づくりが求められる．

参考文献：広井良典．人口減少社会という希望．朝日新聞出版，2014.

統合医療における看護学部の特徴ある教育の成果と展望

小山　敦代・岡田　朱民

看護学部基礎看護学講座

近年医療に対する考え方が西洋医学のみならず，未来型医療として統合医療の方向に変わりつつあり，本学は“Meiji University of Integrative Medicine”と，名称は先陣を切っている．

本看護学部は，2006（平成 18）年に開設され，次年度には 10 期生を迎えるに至った．教育の特徴は，統合医療の理念を看護学に導入し，人に優しく全人的なケアができる看護専門職者育成を目指している．カリキュラムには，東洋医学や補完代替医療／療法（Complementary and Alternative Medicine/Therapies; CAM/CAT）に関する科目を開講し，看護実践に必要なアプローチの幅を広げることにより，対象のニーズに沿ったこれからの時代に必要な看護実践力を培うことがねらいである．

1 ～ 4 期生の卒業前調査「CAM/CAT 教育の学びと課題」では，臨地実習において看護ケアに「マッサージ」「アロマセラピー」「指圧」等を取り入れており，動機は「リラクセーション効果」「苦痛緩和」等，少しでも安楽が提供できたらという思いで臨んでいた．5 期生では，89％が CAM/CAT 教育に関心を持って学び，80％が満足していた．こうした結果から特徴ある教育の意義は大きいことが明らかになった．7 期生からの新カリキュラムでは，統合医療評価認証機構認定アロマセラピーコース（選択）開設により更なる期待ができる．

また，開設時から本学の特徴ある内容の講演会・シンポジウムの開催や，継続教育の一環としてヒーリングタッチ，リラクセーション，アーユルヴェーダ等の研修会を開催し，多くの修了者を出してきた．展望は，これからの時代に必要な“癒し”“自然治癒力”“セルフケア”への「看護の力」をもった看護師が明治で育ち誇りを持って活躍することであり，未来型統合医療における看護学部として発展していくことである．